

# KUT2012 年度タイ研修にみる国際交流の成果

先川 信一郎\*

(受領日：2013年5月7日)

高知工科大学国際交流センター  
〒782-8502 高知県香美市土佐山田町宮ノ口 185

\* E-mail: sakikawa.shinichiro@kochi-tech.ac.jp

**要約：**KUT2012年度のタイ海外研修が、2013年3月17日から24日までの日程で行われ、システム工学群、環境理工学群、マネジメント学部の2～4年生10人（うち女性2人）が参加した。研修地は泰日工業大学（Thai-Nichi Insutitute of Technology 略称 TNI）やタマサート大学シリントン国際工学部（Thammasat University Sirindhorn International Institute of Technology 略称 SIIT）、在タイ日系企業（トヨタ工場）を選び、八田章光教授（国際交流センター長）、渡邊法美教授、大内雅博准教授、片山保夫教育講師と、国際交流部を含む7人が同行した。研修では、タイと日本の同世代の学生たちが、両国の歴史や文化、大学の研究内容などについて英語で語り、学び合い、友好を深めた。学生たちにとっては、グローバル化を実感するまたとない機会となったことだろう。今後もタイを中心にアジアの各大学、さらに欧米の大学との提携関係を強化していきたい。研修内容と、感想を参加者全員によるリレー形式でまとめた。

## 1. はじめに

KUTの学生たちにとって、同世代のタイの学生たちと英語でコミュニケーションを図り、異文化への理解を深める試みは、大きなチャレンジだった。わずか1週間の滞在ながら、彼らがそこで目の当りにしたのは、混沌としたアジアの熱いエネルギーであり、人々の明るさであり、グローバル化の奔流の真ただ中で躍進するタイの姿だった。こうした体験は、近い将来自分たちが社会に出た時に何をしたいか、何を成すべきかを考えるヒントになったはずだ。参加学生10人は英語によるコミュニケーション能力も向上し、キャンパスの中だけでは学べないことをそれぞれ吸収したように思える。2章以降で各々参加者から寄せられた率直な感想や新しい発見について報告する。

### 2-1. 緊張と友好

研修は18日午後から始まった。徒歩でTNIを訪問し、TNIの国際交流日本人スタッフの大久保氏によるオリエンテーションを受けた。大久保氏はタイ王国の歴史のほか、1週間滞在するうえでの注意点

に触れた後、キャンパス内の職員の部屋や図書室、工業実習施設、学食などを案内してくれた。「泰日」ということもあり、掲示板や表札には日本語が使われていた。日本の文庫も様々な種類が置かれていた。また、安倍晋三首相が今年1月、ベトナム、タイ、インドネシアを歴訪した際、TNIを視察していた。

キャンパスツアーの後、バイキング形式によるタイ料理のもてなしを受けた。最初は香辛料を使ったタイ独特の味付けに戸惑ったものの、おかわりをして食事を楽しむことができた。特に人気だったのが、肉メインのカレーだ。お茶が甘いことにも学生全員が驚いた。食事の後、KUT学生代表として山崎が英語で挨拶をした。

研修初日ということでもあり、大変緊張したが、なんとかこなすことができた。その後、TNIの副学長より歓迎の挨拶があった。

(環境理工学群3年 山崎 奈摘)



キャンパスツアーに興味津津

翌 19 日の午前は、タイの歴史やタイ王国の紹介が行われた。英語に慣れていない KUT の学生にとっては難しい内容だったが、写真や動画を使い、わかりやすく作られていた。このプレゼンテーションを通じ、タイ王朝と日本との関わりや、タイからみた戦前・戦後の歴史について学ぶことができた。

次いで 3 グループに別れ、レーシングカー・ワークショップ、コンピュータ工学コースの研究室と生産工学コースの作業場を見学した。



TNI のフォーミュラーカーと

レーシングカー・ワークショップの隣には日系企業から譲り受けた旋盤の機械などが所狭しと並んでいたのが印象的だった。実際に企業で使用している機械で、就職後の即戦力を養成できるという。これは参考になった。

この後、KUT の SSP 卒業生である Wimol San-um 先生による講義が行われた。テーマは、先生の専門分野である「カオス理論」の概要。難解な分野であるにもかかわらず、「カオス理論」を身近な事象に置き換え、理解しやすいよう工夫されていたのには

感銘を受けた。

(システム工学群 4 年 原 浩彰)

午後からは、タイと日本の文化交流を行った。3 グループに分かれて TNI の学生たちからタイ式ボクシング、タイの音楽、伝統舞踊について教わり、それぞれ成果を発表した。タイ式ボクシングはミット打ちでパンチやキック、肘打ち、膝蹴りを披露した。音楽は、ラナート・エーク、コン・ウォン、ラナート・トゥムと呼ばれる楽器を用いての演奏。伝統舞踊は、タイの伝統衣装に身を包んだ KUT と TNI の学生が、曲に合わせて一緒に踊りを楽しんだ。



タイの伝統舞踊を踊る KUT と TNI の学生

タイ式ボクシングは激しい技が多かったのに対し、音楽や踊りはゆったりとしたテンポで滑らかな手の動きが特徴的だった。タイの文化に直接肌で触れることによって、大らかで前向きな国民性を持つことがわかり、お互いの文化を尊重することの大切さを感じた。

この後、私たちはパワーポイントで日本の文化や歴史の特徴、KUT についてのプレゼンテーションを行い、よさこい踊りとアカペラによるアンパンマンのマーチを披露した。

最初はお互いに少し緊張気味だったが、それぞれのタイの文化学習の発表が終わり、全員で伝統舞踊を踊ったところから、みんなの距離がぐっと近くなり、会話にも弾みが出るようになった。音楽によるコミュニケーションは、万国共通であることをあらためて実感した。

(環境理工学群 3 年 小松 寛卓)

## 2-2. 異文化の中で

20日はTNIの学生たちとともにタイ・トヨタ工場を訪問した。経営理念や環境問題についての考えを聞いた後、製造工程の説明を聞きながら工場内を見学した。トヨタでもらった帽子はタイの強い日差し対策として、工場見学後も多くの学生や職員が使用していた。その後、湖に浮かぶレストランで海鮮やフルーツなど様々なタイ料理の昼食を済ませ、100年市場と呼ばれる水上マーケットへ移動した。



トヨタの最新工場の前で

水上マーケットは水辺に多くの店が並んでおり、想像していた様な船で移動する市場ではなかった。そこは散髪店や飲食店などもあり、観光客だけではなく、周辺の住民が買い物に行くような庶民的な市場であった。学生たちはココナッツのお菓子やハンモックなどそれぞれ欲しいものを買っていた。そこでは庶民の逞しい生活ぶりを知ることができた。

この日の最後に、ルアン・ポー・ソートンというお寺を見学した。TNIの学生たちに、お寺では帽子をとることや参拝方法などを教わりながら仏像に参拝した。その様子から、タイのお坊さんは、敬われていることを実感した。

(システム工学群4年 中村 泰介)

研修1日目から3日目は、TNIの学生とともにタイの歴史や文化を学んだ。KUT側の学生は、日本文化・芸術を紹介した。こうした活動を通じ、お互いの国の文化について理解し合うことできたのは収穫だった。

研修時間外の自由行動でもTNIの学生たちがKUTの学生たちを案内してくれた。バンコク市内では、様々なタイ料理やタイマッサージを体験することができた。タイ料理の名前や材料をTNIの学生

が教えてくれ、KUTの学生がそれをノートにメモする場面もあった。

移動の際にタクシーを利用したが、道路がひどく渋滞していた。スカイトレインを利用した際も込み合っていて、人口増加による弊害を垣間見た。しかし、日本にはない人々の「勢い」を肌で感じることもできた。



スカイトレイン内にて

ところで、KUTの学生とTNIの学生との会話は、英語だけではなかった。日本語とタイ語をそれぞれ教え合ったりしたおかげで、KUTの学生も少しだけタイ語を話すことができるようになった。TNIの学生は日本に興味のある学生ばかりで、タイの学生が日本をどう思っているのかを知ることができた。KUTの学生も日本を客観的に見ることもできるようになる。日本のアニメは人気があり、KUTの学生よりも日本のアニメに詳しいTNIの学生がたくさんいた。

(システム工学群4年 田中 一徳)

## 2-3. 英語での議論も

研修も半分が過ぎた4日目の21日朝、3日間滞在したホテルを後にしてバスでタマサート大学(SIIT)のドミトリーへ向かった。そこで荷物を降ろしてすぐにSIITを目指した。大学は目と鼻の先にあった。

到着後学内の教室内にてSIITの学生と対面し、両大学によるスピーチや記念品の贈呈後、KUT代表の本岡とSIIT代表が簡単な挨拶を行った。

その後、SIITとKUTの学生がそれぞれプレゼンテーションを行った。SIITの学生たちはみな流暢な英語を話すため、KUTの学生たちは緊張していたが、KUT側のプレゼンテーションは2回目という

こともあって、泰日工業大学での時よりもワンランクレベルアップしていた。



ドミトリーに到着した KUT の学生

よさこい舞踊、アカペラによるアンパンマンマーチは、SIIT の学生たちに非常に好評だった。その後も多くの KUT の学生が、踊りの方法や日本の歌について SIIT の学生と盛り上がることになった。

プレゼンテーション終了後、KUT 学生のバディが発表され、学内の中庭で SIIT 学生とともに昼食を食べた。昼食はタイ料理の弁当を複数種類から選ぶ方式だったが、その中の一つであるグリーンカレーは KUT の学生にとっては未体験の辛さであった。簡単な自己紹介では、双方の学生がネームプレートにそれぞれの名前とニックネームを書き込み、首に下げた。初対面時はやや物静かな雰囲気 of SIIT 学生であったが、話してみると、みな明るくて話題が尽きることがなく、素晴らしい昼食会になった。

(システム工学群 2 年 本岡 誉登)

昼食後、SIIT の学生とともにキャンパスを見学した。とにかく、その広さと設備の充実度には感嘆した。オリンピックを行うことが出来る競技場や、屋上から眺めた、どこまでも続くオレンジと白のコントラストの景色に思わず目を奪われた。

TNI の学生たちとの交流の時とは打って変わって、KUT の学生たちは英語のみで SIIT 学生と接することになった。SIIT の学生に比べると、たどたどしい英語ではあったが、SIIT の学生が明るく笑顔で接してくれたおかげで、KUT の学生たちも徐々に話せるようになった。



SIIT と KUT の学生たちの交流会

研修生の中には、出発する前から関心があった、バンコクの 2 年前の洪水の被害について尋ねる人もいた。SIIT も例に漏れず、洪水の被害に遭っており、今なお至る所に瓦礫の残片を確認することが出来た。それほど大規模な災害だったのであろう。

キャンパス見学を終えてから、KUT の学生と SIIT の学生との交流会が行われた。アイスブレイキングでは、KUT の一人がおどけると、SIIT 学生が突っ込んだりして終始笑顔が絶えなかった。そのころにはお互い、緊張という言葉も忘れていた。一段落終わると、KUT と SIIT の混合グループで、日本とタイの食文化、祭り、言語の違いなどを話し合いながら、模造紙にまとめ、チームごとに発表を行った。自分たちが「タイと日本語の文法にどう違いがあるか？」など、英語で議論出来てしまうなんて、出発前に考えられただろうか。この数時間で、KUT の学生の実践的な英語力が着実に上がっているように感じられた。

(環境理工学群 4 年 宮川 結衣)

## 2-4. 文化遺跡に感動

研修 5 日目は、SIIT の学生とともにバスでアユタヤを見学した。SIIT のドミトリーを朝 9 時に出発し、快適な高速道路を約 2 時間走って到着した。アユタヤは、一昨年の洪水で大きな被害を受けたが、遺跡はきれいなまま残っていた。逆に、ところどころに見られた災害を乗り越えた傷跡が、より美しく感じられた。

日差しが鋭く差し込む昼時、アユタヤ見学を開始した。ワット・チャイワッタナラームではそのスケールの大きさと、建物が醸し出す独特の雰囲気に、みな興奮冷めやらぬ様子だった。ワット・プラ・マハタートでは建造物の随所に、首や胸より上を切断

された石像が見られた。SIIT の学生によると、戦の際に敵によって破壊されたものであるという。

アユタヤ遺跡では建造物に登っての見学が可能であった。タイでは、こういった文化遺産を見学するには時計回りで見学するのが良いと SIIT の学生に習った。あまり気にする必要はないが、タイのお葬式の際に反時計回りで回る習慣があるからだという。タイも日本と同じように、「縁起の良し悪し」を考える文化があるようだ。



ゾウ乗りを初体験

続いてエレファントステイへと向かった。ゾウを間近で見た KUT 学生の興奮は SIIT 学生を巻き込み、賑やかな体験学習となった。戦争の時、背に乗って戦うほど、ゾウは古くから人間に関わり、過去には国旗にも記されていた。タイのシンボルともいえる動物である。ゾウ使いとは信頼関係で成り立っているかにも見えるが、主従関係のようにも感じられた。タイの人々と、ゾウの関わりの深さを垣間見ることができた。KUT 学生はたくさんの建造物を見学し、歴史や文化を学びとるよい機会となった。そこには新鮮な驚きと、多くの発見があった。

(マネジメント学部3年 大澤津 将希)

さて、研修の最終日は SIIT の学生たちとともにバンコク市内を見学した。午前8時に宿泊施設であったナモトマンションの外にすべての荷物を持って集合し、バスで王宮見学へ向かった。バスではガイドの方がタイについてのクイズを出したりして

くれた。



サイアムパラゴンにて

王宮では、全員で集合写真を撮った。中に入ると、世界中からのたくさんの観光客で込み合っていた。タイ人と外国人観光客とは入口が異なり、外国人のみ入場料が課せられた。王宮のデザインは中国やヨーロッパの影響があちこちに見られ、日本の寺院に比べて装飾が細やかだった。壁面にはタイの歴史や神話がランダムに描かれているなどの特徴があった。戦争によって何度か焼けたため、修復されたという。隣接の博物館には貴重な装飾品も保存、展示されていた。

その後は KUT の学生 1、2 人に SIIT の学生が数名付き添う小グループに分かれ自由行動となった。大森と宮川は Jinny と Carmen で 4 人グループを組み、ワットポー寺院とサイアム周辺を観光した。ワットポー寺院は王宮と同じような様式で建物が装飾され、外には神様や動物を模した石像が配置されるなど、とても迫力があつた。

サイアム周辺は食べ物や電化製品、洋服などの様々な露店が数多く並び、たくさんの人で賑わっていた。売り値は観光客相手に少し高めに設定されている事があるようで、SIIT の学生たちが値引き交渉をしてくれた。その後、サイアムパラゴンで昼食と買い物を済ませ、集合場所へ向かった。バスに乗り込んだ後も SIIT の学生は手を振って見送りをしてくれ、KUT の学生もそれに応える形で別れの挨拶となった。

(システム工学群3年 大森 匠)

タマサート大学シリントン国際工学部 (SIIT) の学生たちは英語力がかなり高く、KUT の学生は初めのオリエンテーションでの SIIT 側のスピーチで

委縮していた。しかし、いざ交流が始まると、SIITの学生たちがしっかりと英語の軸を持っていたこともあって、スムーズに話し合うことができた。TNIでは、日本語をメインにサブで英語を使ったが、SIITでは英語だけで話した。

後半になると、多くのKUTの学生が積極的になった。このことも交流がうまくいった要因の一つだろう。全体的にみて、KUTの学生とSIITの学生とでは、大きな英語力の差が見られた。特に問題視すべき所はリスニングではないかと考えられる。単純な文だけであれば、多くのKUTの学生は会話をすることができたが、少し接続詞や副詞が会話に入ってくると、会話内容の理解が薄くなることが多く見られた。リスニングがうまく行くと次の課題はスピーキングだが、当面の問題はリスニングだろう。

(環境理工学群3年 下田 隆正)



アユタヤでみんなでジャンプ

### 3-1. 驚きと発見—学生の感想

#### ① 山崎 奈摘

今回の海外研修に参加したことは、私にとって大きな財産となった。現地の学生たちと英語でコミュニケーションをとることで、英語で話すということに対する恐怖心が薄れた。このことは、大きな進歩だと思える。また、もともとお寺や伝統ある建物が好きな私にとって、アユタヤをはじめとする様々な寺院を参拝できたことに、タイの歴史を感じた。同時に、私自身が人としてどうあるべきかなど、考える良い機会となった。まだまだ未熟な部分があるが、研修を機に大きく成長するべく勉学に励みたいと思う。今回の研修旅行をサポートしてくださった、国際交流部をはじめ、たくさんの方々に感謝したい。

#### ② 原 浩彰

タイ研修に参加して、工学を学ぶ学生同士、お互いを知りたいと言う気持ちで接することで、相手を理解することができたと思う。しかし、母国語でない英語でのコミュニケーションは、細かい気持ちを伝えることに苦労した。グローバル社会である今日、正しい英語を学ぶ必要性を感じるとともに、お互いの文化の違いを認め、理解できることを面白いと思う人間になりたいと思った。

#### ③ 小松 寛卓

私は当初、この海外研修に英語能力の向上を一番の目的として参加した。実際、感覚的な英語の使い方や、リスニング能力などは大きく向上したが、自分の中で特に変化を感じたのはコミュニケーション能力や積極性といった内面の部分だった。新しい環境の中、積極的に行動することで、以前より様々なものに興味を持ち、活動していこうという姿勢が強くなったと思う。タイで出会った人たちは親切で明るく、笑顔がとても印象的だった。私もタイで過ごすうちに自然と笑顔でいることが多くなっていった。今回の研修は、初めての海外で不安でもあったが、それ以上に自分の成長を感じることができた。参加できて本当によかったと思う。

#### ④ 中村 泰介

研修では、タイの学生との交流が一番印象深かった。ほぼ全ての行程をTNIとSIITの学生とともに行動し、市民が通うタイ式マッサージやMBKでの買い物など、少ない時間の中で私たちがしたいことや、食べたいものなど、様々な要望をかなえてくれた。タイの学生との会話では英語を使い、日本の“いただきます”を教えたり、タイ語を習ったりと、楽しく充実した時間を過ごした。なかでも、辛くて酸っぱいタイ料理トムヤムクンの味と、ゾウに乗ったことは忘れられない。また機会を作ってタイに行き、TNIやSIITの学生たちと再会したい。

#### ⑤ 田中 一徳

研修を通して最も印象に残ったことは、タイに活気があったことだ。特にお世話をしてくれたTNIとSIITの学生たちはみんな明るく、毎日楽しく過ごすことが出来た。また、TNIの学生はタイ語の他に英語と日本語を学んでおり、SIITでは、すべての講義が英語で行われていた。自分たちと同じように、母国語ではない英語を日常で普通に使っているこ

とにより刺激を受けた。

#### ⑥ 本岡 誉登

研修で最も楽しかったのは、最終日の王宮見学と自由行動だった。タイ独特の装飾や金色の釈迦像等がとても印象的だった。移動に使ったトゥクトゥクにかなりの人数で乗ったり、バスが止まってくれずにみんなで無理やり駆け込んだりと、日本では絶対に無いような体験が出来たのが非常によかった。昼食後はサイアムパラゴンで様々な買い物を楽しんだが、デパート内でも値切り交渉が出来るのが意外だった。ある程度の英語や日本語が通じ、元値よりもかなり安く商品を購入できたのもよい経験になったと感じた。タイでの研修は非常に実り多いものであり、今後もこういった国外で活動するイベントなどには積極的に参加していきたい。

#### ⑦ 宮川 結衣

研修に参加して気付いたことは、東南アジアが思いのほか魅力的な国々だということだ。「海外旅行でどこに行きたいですか？」と聞くと、欧米諸国に行きたいと答える人が多いだろう。今までは自分もその1人だった。しかし、指導教員の勧めで行ったベトナム研修に続き、今回のタイ研修によって、日本と違う伝統的な建築技術やおもてなしの文化に興味をひかれた。アユタヤで寺院を参拝してみると、今まで見たことない光り輝く如来像が「タイの事を舐めていただろう。実際はどうだったかい？」と聞いているような気がした。スイマセン。ちょっと勘違いしていました。と如来像に謝った。とても魅力的な場所なので、また訪れたい。いつまでも日本とタイの関係が良好であることを願っている。

#### ⑧ 大澤津 将希

研修全体を通して、異文化を知ることの楽しさを感じた。言語、食、歴史などを自国と比較し、タイの学生と知識を共有することで、驚きと発見がたくさんあった。また、研修の中で、文化交流に大切な4つのことを私なりに学んだ。それは、聴こうとする、知ろうとする、覚えようとする、伝えようとする—ということだ。会話は英語で行ったが、相手の話をしっかり聴き、質問して相手の文化について知ろうとする、タイ語などを積極的に使って覚えようとする、そして、タイの文化について教えてもらったこと以上に、日本文化を相手に知ってもらおうと伝える、このことに気付き、実践できたことが私の

今回の収穫だと思う。それに伴い、今回は英語だったが、共通の言語の重要性を日本にいる時よりも強く、深く感じた。1週間の滞在の中で全身を使い、五感で感じたものを、日々の生活に生かし、周囲の人々と共有したいと考えている。

#### ⑨ 大森 匠

タイの学生はとても行動的でポジティブな人がたくさんいた。私の英語力が十分ではなかったため、始めはどうやって切り出そうかと考えていたが、日本とタイでは文化や食べ物、流行などすべてが違う、最後まで話のネタが尽きることはなかった。その日の日程が終わると、夕方から夜にかけてはタイの学生と観光やショッピングと、いろいろな場所へ連れて行ってもらった。帰国後もタイの友人たちとFacebookやメールなどで交流を続けている。

#### ⑩ 下田 隆正

私は1度、交換留学生としてタイを訪れたことがあった。しかし留学自体は失敗に終わり、心にわだかまりを残していた。だが、今回の海外研修によって、あらためてタイ人の温かさを知った。英語力を向上させて挑んだので、コミュニケーションの楽しさを知り、また、違った価値観を持つ人からの情報は新鮮なものばかりであった(例えば、寺での参拝方法や仏の位置付けなど)。そんな中、私の心に一番残っているのは、SIITで以前お世話になっていた先生に“MY SON”と言われたことである。ここで私は、自分だけが言葉の壁を拒絶していたのだと感じた。交換留学でタイに行った時にもっと交流しておけば、もっと英語能力は上達していて、なおかつ変なコンプレックスを抱えることはなかっただろう。私は今回の海外研修において、前回の交換留学のリベンジを果たすことができたのではないかと考える。また機会があればタイを訪問しようと思う。

### 3-2. 成長を実感—同行者の感想

旅程の途中から参加し、しかも連日大学訪問の予定を組んだため学生の研修には一部合流したのみであるが、TNIとSIITで用意していただいたプログラムが大変良く練られており、本学学生は誰も尻込みすることなく、積極的に活動することができたと思う。参加メンバーが最初に集まった事前研修では、英語力、コミュニケーション能力とも大いに心配になったが、国際交流部スタッフ等の熱意ある指導により、研修の度に大きく成長した。実際タイに

行ってみるとタイの学生はみんな非常に明るく遅くキャンパスが活気に溢れていた。本学学生は、最初は圧倒されながらも徐々にその雰囲気にも染まり、タイ学生の良いところを多く感じとり学ぶことができた。これまでの海外研修の中でも参加者が最も成長した成功事例となった。（八田 章光）

今回の研修は、工科大生にとって、とても実り多きものになったと思う。第一の理由は、国際交流部（IRC）メンバーによる辛抱強く丁寧な事前研修が大変効果的であったことである。指導して頂いたメンバーの皆さまに改めて感謝申し上げたい。第二は、先方の TNI と SIIT が、大変温かく工科大生と私たちスタッフを迎えて頂いたことである。数々の心温まるおもてなしを頂いた、両校の学生と教職員の皆さまに心から感謝申し上げます。最後に、我が工科大生の資質の高さを挙げたい。元々、工科大生は、「キャンパス訪問者にも挨拶をする」、「地域活動を熱心に行う」学生として有名である。今回、その高い資質が、IRC スタッフの事前研修と先方の温かいおもてなしの心によって触発され、海外でも芽生えたように思う。人は人によって愛されて人になる。タイ人からも愛された KUT 生が、さらに魅力的な人になってくれることを心から願いたい。ありがとうございました。（渡邊 法美）

今回の研修旅行が大きな成果をあげたことは間違いない。その理由は事前訓練そして用意周到な準備の賜物である。泰日工業大学、タマサート大学シリントン国際工学部、そして IRC スタッフの貢献に心より御礼申し上げます。

さて、手間と時間と費用をかけた研修である。今回のやり方が具体的にどのような効果をあげたのか、当初の目的と比較して明らかにしておく必要があると思う。

実現すべき目的はいくつか有り得るが、今後のために特に以下の点を明確にしておく必要がある。それにより選考方法と研修内容の改善を絶えず図っていく必要があると思う。

- 研修自体が目的か、あるいは研修による刺激（国際活動または英語学習への意欲）が目的か。
- 研修参加のための英語力評価の意義：能力を評価するためか、あるいは外国語（英語）学習の動機とするか否か。

（大内 雅博）

応募学生の選考から参加した身にとって、はたして KUT の学生は海外研修を無事終えることができるのだろうかという不安が付きまとっていた。事前研修を参観してみたが、参加学生の英語力が進歩していることには気付いたものの不安は消えなかった。しかし不安は見事に消え去ったと言っても過言ではない。研修旅行で目を見張るぐらいに大きく頼もしい存在へと変化した。それもわずか1週間足らずの間にある。帰国後もそのモチベーションを維持し、日々進歩を続けられる人材であってほしいと心から願う。（片山 保夫）

今回の研修は、過去に行われた同様の研修と比較しても例がないほど事前研修に時間を割き、学生いわく「単位がとれるやん」と言うほどのスケジュール（全13回、うち6回が英語研修）が組まれていたが、事前研修段階から参加学生たちは英語でのコミュニケーションに積極的であり、受け身ではない関わりが見られた。タイに到着してからの成長は更にそれを上回るものであったが、何よりも、「間違えてもいいんだ」「伝えようとするのが大事なんだ」という事実に気付けたこと、あらゆることに積極的になれる素地ができたこと、そしてタイで関わった学生たち、さらには共に参加した日本人学生同士、新しいコミュニティーを築けたことが大きな財産になったと思われる。学生の成長を実感でき、職員としても充実した研修であった。（福留 園子）

今回、事前研修から本番、帰国後の学生の様子を間近で見て、当初の想像を上回る学生のやる気とモチベーションの高さに驚いた。出発間際まで学生は「英語・海外・国際」という言葉に高い壁を感じていたが、現地で軽く背中を押してあげると、失敗を恐れることなく新しい世界に飛び込んでいく姿は頼もしかった。それは、タイの訪問大学が本学学生の受け入れのために作成してくれた研修プログラムと、タイの学生の温かいおもてなしの精神によるものが大きかった。そして、学生の頑張りも称賛したい。現地では、英語によるプレゼンテーションを堂々に行った。よさこい踊りとアカペラソングの文化披露では、タイの学生たちの興味を大いにそそり、その時の10人の勇姿に思わず目頭が熱くなった。今後、この研修で大きく成長した学生の活躍に期待するとともに、この研修に関わったことに感謝したい。（藤井 里香）



今回のタイ研修に参加した 10 人の KUT 学生は、タイ到着時には英語力に対しての引け目や、初めての異文化交流に対してやや遠慮がちな雰囲気が感じられた。しかし、積極的にコミュニケーションを図ろうとする TNI や SIIT の学生と交流を行う中で彼らの姿勢に触発され、英語力に対する苦手意識よりもタイの大学生と交流を深めようとする意識が徐々に強くなったように感じられ、研修中盤から自ら積極的にコミュニケーションを図る姿が見られた。参加学生からは、この研修で自らの学力不足を痛感し、より語学力を向上させたいとの意欲が生まれたという感想を聞くことができた。またグローバル化に対する必要性を具体的に感じた様子であった。

研修を通して学生たちの適応力の高さに驚くとともに、異文化経験が様々な学習に取り組むためのモチベーションにつながるものであると感じた。同時にグローバルに活躍できる人材を養成するためには、こうしたプログラムを充実させるなど環境整備の必要性を痛感した。 (井村 公一)

#### 4. 終わりに

国際交流の一環として行われたタイ研修は、学生たちがこれまでイメージしていた世界と、現実の世界との違いを認識させるきっかけとなったのではないだろうか。21 世紀は「アジア・太平洋の時代」である。そこで、東南アジア諸国連合 (ASEAN) をけん引するタイを訪れ、自分の目で確かめ、人々と交流してアジアの風を感じたことは、大きな財産となったはずだ。

その一方で、学生たちにとっての大きな課題は、コミュニケーション能力だった。タイの人々と英語でコミュニケーションを図るには、相手の言うことを理解し、自らの考えを伝えなければならない。きちんと「伝える」には、語学に磨きをかけ、自分の考えを持ち、専門分野はもちろん、日本の文化や歴史、政治、社会、外交のことを知っておくことが必要となる。

留学や海外研修は、自らの座標軸を移動させることでもある。そこから世界の多様性や異なる視点を学び、自らの地図を描くことができるだろう。これからもぜひ多くの学生に参加してもらいたい。

# **The Results of the International Relations Program during the Thailand study tour**

**Shinichiro Sakikawa**

(Received: May 7<sup>th</sup>, 2013)

International Relations Center, Kochi University of Technology  
185 Tosayamadacho-Miyanokuchi, Kami, Kochi, 782-8502, JAPAN

E-mail: sakikawa.shinichiro@kochi-tech.ac.jp

**Abstract:** The Thailand study tour of KUT was carried out from March 17 to the 24<sup>th</sup>, 2013. Participants included ten students from the School of Systems Engineering, the School of Environmental Science and Engineering, and the School of Management. For the training location, Thai-Nichi Institute of Technology (TNI), Thammasat University Sirindhorn International Institute of Technology (SIIT) and Toyota factory in Thailand were selected. The chair of International Relations Center, Professor Akimitsu Hatta, Professor Tsunemi Watanabe, Associate Professor Masahiro Ouchi, Yasuo Katayama a Lecturer, and the administrative staff members accompanied the students. During this training, the students have learned about the history of both countries, their cultures, the details of campus life at TNI and SIIT. Thai and Japanese students spoke in English, studied together, and formed deep friendships. I believe that this was a unique opportunity for the students to experience globalization. I hope we can continue to strengthen our partnerships with universities in Asia as well as in Europe and US.